

ガイドラインに沿った MRI のルーチンプロトコール

序 説

工藤 與亮 *

MRIは、多様な撮像シーケンスとパラメータを自在に組み合わせることにより、対象臓器や病態の診断に最も適した画像を描出できる点に特徴がある。画像診断医にとって、検査目的や臨床疑問に応じて最適な撮像条件を設計することは、まさにMRI検査の醍醐味である。一方で、限られた人的リソースの中で、すべての症例について撮像法を個別に最適化することは、現実的には困難であり、一定の標準化を伴う“ルーチンプロトコール”の整備が不可欠である。

こうした背景のもと、日本医学放射線学会の『画像診断ガイドライン』では、主要疾患に対する標準的撮像法が提示され、エビデンスに基づくMRIの活用が推奨されている。しかし、実臨床における撮像プロトコールは、施設の装置特性、臨床科の要望、地域の医療体制などにより微妙に異なり、必ずしもガイドライン記載の手法が十分に浸透しているとは限らない。また、診療科を越えた応用が求められる場面では、専門領域外のMRIプロトコールに関する理解が不十分な場合も多い。

本特集「ガイドラインに沿ったMRIのルーチンプロトコール」では、脳神経、胸部、乳房、肝、骨盤(子宮、前立腺)という主要領域を取り上げ、各疾患に対してガイドラインが推奨する撮像法を基盤としつつ、現場で実際に活用されているルーチンプロトコールを紹介する。さらに、撮像目的ごとのプロトコールの変化(スクリーニング、病期診断、経過観察など)、シーケンスごとの意義や工夫、実画像を通じた読影のポイントなど、実践的かつ教育的な内容を重視した構成とした。

MRI技術の進歩に伴い、撮像法の多様化と高速化が進む中で、標準化と柔軟性の両立が、今後ますます重要になる。ガイドラインに沿った撮像をまずは理解した上で、施設独自の工夫と結びつけることは、検査の質を担保し、読影精度を高めるための基盤である。

本特集が、日常診療におけるMRIの標準化・効率化を推進するとともに、画像診断医が専門領域を越えてMRIを再考する契機となることを期待したい。

* 北海道大学大学院医学研究院画像診断学教室
Kohsuke Kudo Department of Diagnostic Imaging, Hokkaido University Faculty of Medicine